

# スキガマシキアダ人——帚木卷の頭中將

望月郁子

## 内容

- 一 はじめに
- 二 指喰ひの女
- 三 浮気な女
- 四 内気な女
- 五 以上三つの体験談の総括

## 一 はじめに

「一」(帚木卷での頭中將の登場場面)

「宮腹の(桐壺帝ノ妹大宮ヲ生母トスル)中將は、中に(左大臣ノ子息ノ中デモ)親しく(光ノ傍ニ居ルコトガ多ク)馴れきこえたまひて、遊び戯れをも人よりは(光ニ対シテ)心やすく馴れ馴れしくふるまひたり(勝手気儘ナ対応・行動

ヲシテオイデタ。右の大臣のいたはりかしづきたまふ住み処は、この君もいともものうくして、すきがましきあだ人なり。(五四)

この登場場面での頭中将の紹介のされ方であるが、「すきがましきあだ人なり」と締め括ることにより、スキガマシキアダ人が頭中将に対するレッテルであると強調されている感がある。この語句は、従来、「どうも色恋ごとに熱心な好き人である。」という程度に受けとめられてきた。<sup>(1)</sup>「すきがましきあだ人」とは、を含めて、頭中将の「すきがましきあだ人」ぶりが、明確にされなければならない。

物語の場面は、「長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌みさしつづきて、」光も宮中の「御宿直所(桐壺)」で御物忌に籠もる、すなわち、寝ずに一夜を明かさなければならぬ。そこへ、「左馬頭、藤式部丞御物忌に籠らむとて参れり。(左馬頭ハ)世のすき者にて、ものよく言ひとほれるを、中将待ちとりて、この品々(上中下ノ分類基準)をわきまへ定めあらそふ。いと(全ク)聞きにくき(平氣デ聞イテイレナイ)こと多かり。(五八)」であるという。

以下、光を含め男四人の夜明しの話、「雨夜の品定め」が語られる。左馬頭が光相手に女性論を語り、夫婦の体験の打ち明け話となる。

体験談は、まず、左馬頭が、指喰いの女・浮気な女との体験を語るのであるが、頭中将が口を挿む部分の本文をどう読むべきか、必ずしもすんなりと読めない部分がある。頭中将という地位の人間であるからには、女性に対しても、それなりの誠意を常に失わない人格者であるはずだという意識で、従来、読まれてきた。スキガマシキアダ人というレッテルを積極的に意識して読むと、体験談はどうなるのか。度の過ぎたあくどいことが、光源氏の前ですっぱ抜かれるのかどうか。頭中将をスキガマシキアダ人と意識して、本文の読みを吟味し、頭中将の対女性・広げれば対人間の基本意識・在り方が明らかにされなければならない。

以下、△内容▽に示した通り、指喰ひの女・浮気な女・内気な女・この三つの体験談の総括、の順に取り上げる。

登場する四人の男であるが、光は終始聞き役。頭中将は全体のリーダー格の意識で終始するが、左馬頭に頭の上からな  
いところがある（後述）。左馬頭は、「世のすき者にて、ものよく言ひとほれる（五八）」と地の文が評価している。父は  
「大納言（七八）」か。加茂神社の「臨時の祭の調楽（宮中の楽所で行なう舞楽の練習）（七四、頭注一一）」を務めるだけ  
の才能と技の持ち主。藤式部丞は、博士の娘との体験を語る。四人の中では若輩である。

以下、引用本文は、小学館新編日本古典文学全集の『源氏物語1』による。引用箇所の数値は頁数である。

## 二 指喰ひの女

左馬頭が未だ若く身分も低かった頃愛した女性とは、特に美人でもなかったが、夫のために実生活の世話など真面目に誠  
意をこめて尽くし、特に衣生活では染色、縫い物に優れていた。唯一の欠点は、夫の他の女性との付き合いを、口うるさ  
く嫉妬することであった。男は、女に自信があったので、別れる気なら嫉妬をしろ、と強く出ると、女も夫の浮気に我慢  
ができないと譲らず、夫の指に噛み付いた。男はこれまでだと家を出た。（中略）…もどれると思っていたが、よりをもど  
せないまま女は亡くなった。

「（左馬頭）「…いといたく思ひ嘆きてはかなくなりにはべりにしかば、戯れにくくなむおぼえはべりし。ひとへにうち頼み  
たらむ方は、さばかりにてありぬべくなむ思ひたまへ出でらるる。はかなきあだ事をも、まことの大事をも言ひあはせ  
たるにかひなからず、竜田姫と言はむにもつきなからず、織女たなばたの手にも劣るまじく、その方も具して、うるさく（達者  
デ）なむはべりし」とて、いとあはれと思ひ出でたり。（七六）」

亡くなった女を左馬頭は、あの程度で十分で何でもできる達者な女だったと語り、「いとあはれと思ひ出でたり」と、追憶

に浸っている。当の女に対する愛情がにじんでおり、二人がなぜ縊りを戻せなかったのかと、読者は、考えさせられる。

その左馬頭を前にして光は無言である。対するに中将は、

「中将、その織女たなばたの裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞあえまし。げに、その竜田姫の錦には、また、しくものあらし。はかなき花紅葉といふとも、をりふしの色あひつきなくはかばかしからぬは、露のはえなく消えぬるわざなり。さあるにより、かたき世とは定めかねたるぞや」と言ひはやしたまふ。(七六、七七)」

と、黙っていいない。

「げに(ソノ通り)、その竜田姫の錦には、また、しく(及ブ)ものあらし。」とは、左馬頭の女の染色の腕を中将が知っていなければ言えない一言である。更に、「さあるにより、かたき世(他者が入レナイ夫婦仲)とは定めかねたる(断定ハデキナイ)ぞ(ノダ)や(ソウデハナイカ)」という。地の文は、「言ひはやし(ハシャイデ言イ)たまふ」と一言皮肉る。中将がこう言わなければならぬのは何故なのかが問題である。

左馬頭の始めの語りに戻る。夫婦の当該の口論は、男も女も相手に対して絶対に近い程の自信があるからこそ、突っ張り合えるすさまじさである。口喧嘩の挙げ句、男が家を出たとは、その家に女が一人残っていることになる。男主人不在を承知の別の男が、残っている女に、面白半分に接近しようと思えば、格好の餌食とされる危険性は否定できない。中略部分の本文を全部あげる。

「…(左馬頭は)まことには変るべきことも思ひたまへず(今マデ通りノ夫婦仲デイト思イ)ながら、日ごろ経るま  
で消息も遣はさずあくがれまかり歩くに、臨時の祭りの調楽に夜更けていみじうみぞれ霽降る夜、これかれまかりあかるる  
(舞楽練習仲間ガ其々ノ家路ニ向ウ)所にて思ひめぐらせば、なほ家路と思はむ方はまた(指喰ヒノ女ノ家以外ニ)なか

りけり（無イノダト解ッタ）。内裏わたりの旅寝すさまじかるべく、気色ばめるあたりはそぞろ寒くやと思ひたまへられしかば、いかが思へる（ドンナ顔ヲシテイルダロウカ）気色も見がてら、雪をうち払ひつつ、なま入ろく爪くはるれど、さりとも（トモカクコンナ雲ノ夜行ケバ）今宵日ごろの恨みは解けなむ（必ず解ケル）と思うたまへしに、灯ほのかに壁に背け、萎えたる衣どもの厚肥えたる大いなる籠にうちかけて、引きあぐべきものの帷子などうちあげて、今宵ばかりやと（男ヲ）待ちけるさまなり。さればよと心おごりするに、正身はなし（本人ハイナイ）。さるべき女房どもばかりとまりて、『親の家に、この夜さりなむ渡りぬる』と答へはべり。艶なる歌も詠まず、気色ある消息もせで、いとひたや籠りに情なかりしかば、あへなき（張り合イノ無イ）心地して、さがなくゆるしなかりしも（左馬頭ノ女性関係ヲ執拗ニ容赦シナカタノモ）我を疎みね（自分ヲ嫌ッテ欲シイ）と思ふ方の心やありけむ（別ノ男ニ心牽カレテイタノデハナイカ）、さしも見たまへざりし（ソナ風ニ思ッタコトハ一度モナカタ）ことなれど、心やましきままに（雲ノ中ヲ来タノニ、不在トハ。コチラガ完敗ダト）思ひはべりしに、着るべき物（コノ家デ左馬頭ガ着テ当然ノ衣裳）、常よりも心とどめたる（心細カニ染メ上ゲタ）色あひ、しざま（仕立テノ丁寧サ）いとあらまほしくて（理想的デ）、さすがにわが見棄ててむ（別ノ男ニ言イ寄ラレテ、彼女ガ左馬頭ヲ見限ッタ）後をさへ（後マデモ左馬頭ヲ）なむ思ひやり（心ニカケテ）後見たりし（世話ヲシテイタノダト記憶ニ留メテイル）。

さりとも（別ノ男ガ何ヲシヨウト）絶えて思ひ放つやうはあらじと（左馬頭トノ仲ヲ切レルハズガナイ）と思うたまへて、とかく言ひはべりしを、背きもせず、尋ねまどはさむとも隠れ忍びず、かかやかしからず（別ニ赤面モセズ）答へつつ、ただ、『ありしながらは（今マデ通りデハ）えなむ見過ぐすまじき（結婚生活ヲ続ケルコトハデキマスマイ）。あらためてのどかに思ひならばなむ（家ニ落ち着イテクダサルノデシタラ）あひ見るべき（夫婦デイレル）』など言ひしを、さりともえ思ひ離れじと思ひたまへしかば、しばし懲らさむの心にて『しかあらためむ』とも言はず、いたく綱び

きて見せしあひだに、いといたく思ひ嘆きてはなくなりにかば、戯れにくくなむおぼえはべりし。：(七四―七六)「以上を、左馬頭は、光源氏・頭中将・藤式部丞の前で語っている。聞き手の表情・反応を確かめながら語るのが普通である。思うに、翼の夜、女が左馬頭を待つ支度を整え乍ら、親の家に行って身を守ったのは、左馬頭の不在を知って、入り込む男から連絡があったか、二人の男の鉢合わせを恐れたからであろう。そこに至っても、左馬頭が、女の心が自分に在ったと自信を持って強調するあたり、頭中将に対する左馬頭の対抗意識がはっきり窺える。指喰いの女とのよりがもどらなくなつた要因は、別の男の介入に女が精神的に傷つけられたことが大きいと想像できる。

左馬頭の指喰いの女の語りが終わった時点で、中将は、何らかの自己弁護をしなければならない氣になつたのであろう。「さ(夫ノ不在中ニスキガマシキアダ人が介入スルコトガ)あるにより、かたき世(堅イ夫婦仲)とは定めかねたる(決メルコトハデキナイノダ)ぞや」は、左馬頭に対する高圧的な嫌がらせである。頭中将の言葉には、女性に対するぬくもりが感じ取れない。

以上の材料だけで頭中将を読み切れるか、問題には違いない。後述五での総括まで論定は残す。

### 三 浮気な女

左馬頭の体験談の二つ目。本文を引く。

「さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人も立ちまさり(指喰ヒノ女ヨリ、生マレ育チガ一段上デ)、心ばせ(天性ノ才能ガ)まことにゆゑあり(確カニ一流ダ)と見えぬべく、うち詠み、走り書き、掻い弾く爪音、手つき口つき、みなたどたどしからず見聞きわたりはべりき(舞樂に強い左馬頭が及第点をつけていた)。見るめも事なくはべりしかば、このさがな者をうちとけたる方にて、時々隠るへ見はべりしほどはこよなく心とまりはべりき。この人(指喰ヒノ女ガ)

亡せて後、いかがはせむ、あはれながらも過ぎぬるはかひなくて、しばしばまかり馴るるにはすこしまばゆく（派手過ギテ）、艶に好ましきことは目につかぬ（左馬頭ノ好ミアワナイ）ところあるに、うち頼むべくは見えず、かれがれにのみ（タマニ会ウ女友達ト）見せはべるほどに、忍びて心かはせる人ぞありけらし（左馬頭ノ目ヲ盗ンデ、氣持チヲ通ワス男ガイタヨウダッタ）。（七七）

ここまでで、左馬頭は、この女性が自分以外に別の男と付き合っていると判っている。

以下が、男二人の鉢合わせの語りである。

見通しを先に述べる。女が鉢合わせを承知で男二人を同時に迎えたのではあるまい。「ある上人（うへびと）」が、左馬頭に女と自分との二人の風流ぶりを見せ付けることができるように、意識的に仕組み、風流におぼれる女が、「ある上人」の意のままになり、浮気ぶりを発揮した、そういう事である。「ある上人」とは誰か、頭中将と決まるかどうか、読みの問題の一つである。

「神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、内裏よりまかではべるに、ある上人（仮にAとする）来あひて、この（左馬頭ノ）車に（Aガ）あひ乗りてはべれば、大納言の家にまかりとまらむとするに、この人（Aガ）言ふやう、『今宵人（男ガ来ルノヲ）待つらむ（今頃待ッテイル）宿なむ、あやしく心苦しき』とて、この女の家はた避きぬ道なりければ、荒れたる崩れより池の水かけ見えて、月だに（池ノ水ニ）宿る住み処を過ぎむもさすがにて、（左馬頭ノ女ノ家で、Aガ車ヲ）おりはべりぬかし。もとより（前モッテ）さる心をはせるにやありけむ（Aト女トデ今夜ノ連絡ガトレテイタノダロウ）、この男（Aハ）いたくすずろきて（ヒドク氣取ッテ）、門近き廊の簀子だつものに尻かけてとばかり（暫ラク）月を見る。菊いとおもしろくうつろひわたりて、風に競へる紅葉の乱れなど、あはれとげに見えたり。懷なりける（Aハ、実ハ懷ニ用意シテイタ）笛とり出でて、吹き鳴らし、影もよしなどつづしりうたふほどに（Aガ歌ッテイル最中

ニ)、よく鳴る(素晴らしイ音色ノ)和琴を調べととのへたりける(実ハ前モツテ調律シテアツタノヲ)、うるはしく(笛ニキチント合ワセテ、和琴ヲ)掻きあはせたりしほど(腕前ハ)、けしうはあらずかし。律の調べは、女のものやはらかに掻き鳴らして、簾の内より聞こえたるも、いまめきたる物の声なれば、清く澄める月にをりつきなからず。(七八)」左馬頭は、宮中舞樂に長けている。女の家に来て、「清く澄める月」のもと、左馬頭の車に勝手に相乗りし、女の家に入り込み、左馬頭をさしおいて、得意の笛を吹く上人AもAなら、女も女である。左馬頭は、牛飼い童と状況を観察する以外にどうしようもなかったであろう。

左馬頭に当て付けたAと女との恥知らずな意気投合は更に続く。

「男、いたくめでて、簾のもとに歩み来て、『庭の紅葉こそ踏み分けたる跡もなけれ』などねたます。菊を折りて、

『琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける

わろかめり』

など言ひて、『いま一声。聞きはやすべき人のある時、手な残いたまひそ』など、いたくあざれかかれれば、女、いたう声つくるひて、

木枯らしに吹きあはすめる笛の音をひきとどむべきことの葉ぞなき

となまめきかはすに、憎くなるも(Aが左馬頭ノ車ニ同乗シテ来テ、女ノ家ニ今、左馬頭ガ居ルトハ知ラズ、女ハ、二人ノ意気投合ブリヲ左馬頭ガ平気デ聞イテイレナクナルノモ)知らで、また箏の琴を盤渉調に調べて、いまめかしく掻い弾きたる爪音、かどなきにはあらねど、まばゆき心地なむしはべりし。ただ時々うち語らふ宮仕人などの、あくまでさればみすきたるは、さても見る限りはをかくもありぬべし、時々にも(時タマ通ウダケノ相手トシテモ)、さる所にて(楽ヲタシナミ合エル女ノ家デアツテ)、忘れぬよすがと思ひたまへむには、頼もしげなく、さし過ぐいたりとおお



かれて、その夜のことにことつけてこそまかり絶えにしか（女トハ絶交シテシマッタガ）（七八〜八〇）」  
左馬頭の第二の体験談は以上である。

以下、左馬頭の光源氏への忠告となる。

「この二つのことを思うたまへあはするに、若き時の心にだに、なほさやうにもて出でたることは、いとあやしく頼もしげなくおぼえはべりき。今より後は、ましてさのみなむ思ひたまへらるべき。御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉笹の上の霰などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそをかしく思さるらめ、いま、さりともし（トモカク）七年あまりがほどに思し知りなむ（七年余リノ内ニオ判リナサルデゴザイマショウ。）なにがしいやしき諫めにて、すきたわめららむ女（今話シタヨウナ浮気ナ女）に心おかせたまへ（御注意クダサイ）。過ちして見む人の（夫ガ）かたくななる（トイウ）名をも（評判マデモ）立てつべき（決マツテ立テル）ものなり」と戒む。（八〇）」  
「七年あまりがほど」は、一般に、「左馬頭は源氏よりも七歳年長らしい」とされる。<sup>(2)</sup>一方、頭中將の年令であるが、葵上が光より四歳上、頭中將は葵の兄である。光源氏より七歳年長者は頭中將の可能性もある。

左馬頭のこの戒めに対する頭中將と光との反応は、

「中將、例のうなづく。君、すこしかた笑みて、さることとは思すべかめり。「いづ方につけても、人わろくはしたなかりけるみ物語かな」とて、うち笑ひおはさうず。（八〇〜八一）」  
である。この部分をどう解釈すべきであろうか。

「中將、例のうなづく」と頭中將は、否定も異議申したてもしない。左馬頭に頭が上がらないらしい。

「（光ハ）すこしかた笑みて（左馬頭ニ、ウインクナサリ）、さることとは思すべかめり（「アル上人（うへびと）ガ誰デアルノカオ判リニナッタト左馬頭ニ読ミ取レル表情ヲナサッタ）。」

「いづ方につけても」は、従来、「指喰いの女と浮気な女との」<sup>(3)</sup>とされて来たが、「頭中将と左馬頭との」と解釈する。「人わろく（不体裁デ）はしたなかりける（取りツク島モナイ）み物語かな（大変ナオ話デスネ）」とて（ト言ッテ）、うち笑ひおはさうず（一笑ニ付サレタ）。」

光は、左馬頭の「指喰いの女」と「浮気な女」との二つの体験談を聞き、頭中将の本性をより正確に理解できた。

左馬頭の車に相乗りして、左馬頭の見る前で左馬頭の女と琴笛の合奏、歌のやり取りを恥じらいもなくやってのけた上人Aとは、頭中将である。でなければ、左馬頭が、とっておきの体験談として、光相手に語る必要がない。

#### 四 内気な女

第三の体験談は、語り手が頭中将に変わる。開口一番「なにがしは痴者（しれもの）の物語をせむ」と、「痴者」が強調される。

その「痴者」の見そめから語りだすのであるが、始めの一文の本文を上、内容を下の括弧内に示すと、  
「いと忍びて見そめたりし人の、（正妻に決して知られてはならない）

さても見つべかりしけはひなりしかば、（女の雰囲気は男の氣に入った）

ながらふべきものとしも思ひたまへざりしかど、（男は長続きすべきでないと思う）

馴れゆくままにあはれとおぼえしかば、（馴れるにつれて女をアハレとは思ふ）

絶え絶え、忘れぬものに思ひたまへしを、（通っては行けないが、忘れはしない）

さばかりになれば、うち頼める気色も見えき。（女は男を頼った）（八一）」

となる。難解な文である。左馬頭による前述の二つの語りでは、語りの冒頭で、女の人柄、男（左馬頭）との関係が、読

者に明確にされていた。頭中将のこの語り出しで分かるのは、まずは、正妻恐怖症的事であること、女と関係は持ったが先がないと、話の始めから光達の前で白状してはばからない、つまり、男に女を守らなければならないという意識が希薄なことである。

「頼むにつけては、恨めしと思ふこともあらむと、心ながらおぼゆるをりをりもはべりしを、見知らぬやうにて（女ハ男ニ不満ナド一切見セズ）、久しきとだえをも、かうたまさかなる人とも思いひたらず、ただ、朝夕にもてつけたらむありさまに見えて、（毎日毎晩、共ニ暮ラシテイルカノヨウナ様子デ）、心苦しかりしかば、頼めわたること（将来マデノ約束）などもありかし。（八一）」

女は、男を好きないようにさせておける、こせこせしない、ゆったりとした人柄らしい。

「親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそは（コノ方ヲ終生ノ夫）と事にふれて思へるさまもらうたげなりき。かうのどけきに（女ガ落ち着イテイルノデ）おだしくて（二人ノ仲ニ波風モ立たズ）、久しくまからざりしころ、この見たまふるわたり（本妻筋）より、情なく（男女ノ仲ヲ理解シナイ）うたてある（度ノ過ギタ）ことをなむさるたよりありて（然ルベキ人ヲ介シテ）かすめ言はせたりける（実ハ、厳シイコトヲ一言ニオワセルヨウニ言ワセタノダッタ）、後にこそ聞きはべりしか（自分ガ事ヲ聞イタノハ後ニナッテカラデ、ソノ時ハ何モ知ラナカッタ）。（八一〜八二）」

正妻筋から入った封じ手については、夕顔死後二条院での夕顔の女房右近の光への語り（夕顔一八五〜一八六）が詳しい。「さるうきこと（ソナナウンザリスル事）やあらむとも知らず（アッタノカトモ知ラナイデ）心には忘れずながら、消息などもせで（一本ノ手紙モ贈ラズ）久しくはべりしに、むげに思ひしをれて（意気消沈シキッテ）、心細かりければ、幼き者などもありしに（二人ノ中ニ子供ガアッタノデー「幼き者など」の「など」の中身不明）思ひわづらひて（子供ヲ男ハドウスル気ナノカ、コノママデハト）、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。（八二）」

本妻筋からの圧力が罹って以後、以前と変わり、意気消沈しきって、二人の中の子供の将来を案じて、女から男に歌が贈られた。思い余ったことであつた。ここで頭中将は、子供（中将にとって初の子かも）の存在を、性を伏せて、打ち明け、涙ぐむ。

「（光ガ）「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや。（八二）」以下、二人の歌を中心とする語りとなる。

「（女歌） 山がつの垣は荒るともをりをりはあはれはかけよ撫子の露」

（私ノ家ハ垣ガ荒ラサレテシマイマシタガ、二人ノ中ノ子供ニアナタノ愛情ヲ折々カケテ下サイ）

（中将の対応） 「子供ヲ」思ひ出でしままに、まかりたりしかば（女ノ家ニ行ク）」

（中将の印象） 「例の（今迄ト同様）、うら（隠シ隔テ）もなきものから（本妻筋カラノ圧力ハ話題ニセズ）、いとも思ひ顔にて（切迫シタ何カガアリソウナ表情デ）、荒れたる家の露しげきをながめて虫の音に競へる（ススリ泣キヲスル）気色（様子）、昔物語めきておぼえはべりし。」

「（中将歌） 咲きまじる色はいづれと分かねどもなほとこなつにしくものぞなき

大和撫子をばさしおきて、まづ塵をだになど親の心をとる。（八二〜八三）」

（女は子供をと言っているのに、頭中将は、女の要求とはうらはらに、子供を優先せず、女の機嫌を取ろうとする。）

「（女歌） うち払ふ袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけり

（女は中将の歌の「とこなつ」を素直に引いて、――嵐ふきそふ（大変ナ風当リノ強サデ）秋（別レノ時）も来にけり（キテシマッテイルノデシタ）という。

(中将の印象) 「とはかなげに言ひなして、まめまめしく恨みたるさまも見えず、涙を漏らし落としても、いと恥づかし  
くつつましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむはわりなく苦しきものと思ひたりしか  
ば、

(中将の対応) 心やすくて、またとだえおきはべりしほどに、

(女の失踪) 跡もなくこそかき消ちて失せにしか。(今マデ住ンデイタ家ヲ出テ完全ニ行方不明トナッタ。これは、夫

の子供を生んだ女を亡き者にしなければおさまらない本妻筋の仕打ちを逃がれての失踪である。)(八三)

女の返し「うち払ふ袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけり」を、普通の感覚の持ち主ならば、嵐のような暴力的な圧力を受けている、別れなければ生きていけない、(子供を守ってほしい)と、受けとめるであろうが、頭中将はそれができない。「はかなげに言ひなして、まめまめしく恨みたるさまも見えず」で終わる。不満を男にぶつけず、平静を保とうとする女を、これなら「心やすく(心配シナイデイイ)」で済みますのが、頭中将である。女の心は全くというくらい彼には通じない。

頭中将の当該の女への未練は残っている。

「まだ世にあらば(生きテイレバ)、はかなき世にぞさすらふらむ(落チブレテ放浪シテイルダロウ)。あはれと思ひしほどに(中将が夢中ニナッテイル最中ニ)わづらはしげに思ひまとはす気色見えましかば(相手ニナルノガ面倒ダト中将ガ思ウクライニ、女ガ要求シテクレレバ)、かくもあくがらさざらまし(コンナニ行方不明ニハシナイノニ)。こよなきとだえおかず、さるものにしなして長く見るやうもはべりなまし。かの撫子のらうたくはべりしかば、いかで尋ねむと思ひたまふるを、今もえこそ聞きつけはべらね(子供ノ行方ハ今モッテ不明)。これこそそのたまへるはかなき例なめれ。つれなくて(中将ニ連絡一ツセス)、つらしと思ひける(ヒドイ仕打ちダト男ノ方デ実ハ思ッテイルノ)も知らで、あは

れ絶えざりしも（アノ女ヲズット思イ続ケテイタノモ）、益なき片思ひなりけり（ムダナ片思イダッタツクツク思ウ）。今、やうやう忘れゆく際に、かれ、はた、えしも思ひ離れず、をりをり人やりならぬ胸こがるる夕もあらむとおぼえはべり。これなむ、えたもつまじく頼もしげなき方なりける。（八三―八四）」

中將がここで言っていることは、中將にとっては嘘ではない、真実こう在って欲しかった、自分に問題があるのではない。こうしなかったあの女が「痴者」だ。これが中將の意識である。

## 五 以上三つの体験談の総括

「痴者」の語りを終わった頭中將は、続けて以上三つの体験談の総括らしいことを言う。三つの体験談の始めの二つの語り手は、左馬頭であった。左馬頭が総括するのが自然である。しかし、頭中將がおそらく年長者であり、社会的立場からしても、今まで見てきた人柄からしても、左馬頭を押さえて、リーダーシップを発揮しなければ治まらないのであろう。以下の総括すべてが、頭中將一人の語りの可能性は考えられてよい。

前述二・三において左馬頭の二人の女それぞれに、頭中將が関係を持ったのではないかと見てきた。その立場で、指喰ひの女・浮気な女の総括部分を読んでみよう。

問題の本文の吟味をしたい。

「されば、かのさがな者（指喰ヒノ女）も、思ひ出である方に忘れがたけれど、さしあたりて見むにはわづらはしく、よくせずはあきたきこともありなむや。（八四）」

左馬頭の女を中將が「かのさがな者」と呼び、「さしあたりて見むには（信頼スベキ妻トシテ対応スルトナルト）わづらはしく（相手ニナルノガ面倒デ）、よくせずは（余程ウマクヤラナイト）あきたきこともありなむや（モウ沢山ト思ウコトモ

キット在ルダロウ。」と言うのは、夫婦喧嘩のあげく左馬頭が家を出、女が一人残っていたところに、中将が押し掛けたが、女に突放されるだけで、ろくに相手にされなかった。さういう類のにがい経験を踏まえて、軽蔑混じりにこう言うと思えば、説明がつく。まさに、スキガマシキアダ人である。

「琴の音すすめけむかどしきも、すきたる罪重かるべし。」<sup>(4)</sup>左馬頭の語り―「ある上人(うえびと)」が、浮気な女の彼即ち左馬頭を立ち合わせて、女と風流を楽しんだ―についての頭中将の総括であるが、「すきたる(風流ニ夢中ニナル)罪は重いとしなければならぬ」とは、誰の罪とするのか。「琴の音すすめけむ」は、従来、「浮気な女」と解されている。しかし、女に琴を弾かせたのは、「ある上人」の笛である。「琴の音すすめけむかどしき」は、笛の「かどかどしき(予想外ノウマサ)」である。頭中将は笛の名手である。「すきたる罪おもかるべし」は、△芸術上の腕の問題▽として、舞楽に勝れている左馬頭に対し、頭中将が左馬頭の語る「ある上人(うえびと)」を一般化して、シラをきっているのであって、「ある上人」は頭中将その人である。

「この心もとなき(内気な女)も疑ひ添ふべければ、」

の「疑ひ」とは、女が子供ともども行方不明であるのは、頭中将を裏切って、別の男に従っているという疑いである。正妻筋に中将との中を切られて、子供ともども身を隠しているのが彼女の実情である。対するに、この語りが、左大臣の嫡男で、将来は臣下の第一人者を殆ど約束されている男の意識である。

大体、源氏物語は、緻密に念入りに組み立てられている。登場人物の意識が繊細に書き分けられている。それらを精密に理解して読まなければならないのであるが、帚木卷の「内気な女」の語りとなると、登場人物相互の意識の「ずれ」の粗さが、読者にはついていけそうもない粗さで描かれている。粗さを粗さとして読むのも骨が折れる。帚木卷の他の巻と違う面白さがそこにあるといえ、いえよう。

帚木卷への登場時点で、頭中将が、「スキガマシキアダ人なり」と強調されているのは、そのつもりで頭中将を読めという、作者から読者への要求である。この小論は、頭中将に貼られているこのレッテルを意識して、帚木卷の体験談を読むことはどうなるか、筆者の読みの試論である。帚木卷は、若い時から教室で何度読んできたことか。古稀を越えた今になって、帚木卷を面白いとはじめて思えた。

頭中将の体験談三つの総括の締め括りは、

「いづれとつひに思ひ定めずなりぬるこそ。世の中や、ただ、かくこそとりどりに比べ苦しかるべき。このさまさまのよきがぎりを取り具し、難ずべきくさはひまぜぬ人は、いづこにかあらむ。吉祥天女を思ひかけむとすれば、法氣づき靈しからむこそ、また、わびしかりぬべけれ」とて、みな笑ひぬ。(八四)」

である。左馬頭が語った理想の女性の論の全てが、飛んでいる。中将は、他者の話を一切受け付けることができず、自分を通すこと以外は頭にない、現代社会でも世に憚っている、人種の代表である。

男四人による夜を明かしての語りという場面設定であるが、男に語らせている作者は女性である。頭中将のスキガマシキアダ人ぶりをここまで語れるのは、女性であればこそである。頭中将の△本性▽が光源氏のそれとは、全く異質であることが、ここ(体験談)で語られている。それも含めて、計算し尽くされた場面設定である。

#### 〔注〕

- (1) 小学館新編日本古典文学全集『源氏物語1』五四頁現代語訳
- (2) 注1の文献の八〇頁の頭注一〇
- (3) 注1の文献の八〇頁の頭注二三
- (4) 『源氏物語大成』によれば、当該部分の本文異同は次のごとくである。



本文（大島本）

「ことのねす、めけんかとくしさもすきたるつみおもかるへし」

異同

「ことのね」―青「ことのねの秀」「ことのねの三」別「ことのねの別」

「す、めけん」―青「す、めりけん秀」河「す、めりけん河」別「す、めりけん陽」「すめりけん國」

「かとくしさも」―青「かとくしくさも秀」

「つみ」―青「つみに池」

「おもかるへし」―河「けにをもかるへし河」別「けにおもかるへし別」

（この異同の多さは、この部分の解釈が特定されにくかったことの反映であろう。）